

献 辞

小島修一先生は、昭和51年4月に本学に経済学部専任講師として着任され、昭和54年4月に助教授、昭和59年4月に教授に昇進し、36年の長きにわたって研究・教育・行政のいずれの方面においても大きく貢献してこられました。が、本年3月末日をもって本学を退職されることになりました。

先生は、昭和44年3月に関西学院大学経済学部を卒業後、同年4月に大阪市立大学大学院経済学研究科に進学され、昭和47年3月には修士課程、昭和51年3月には博士課程を修了されました。昭和50年には、「トゥガン=パラノフスキー研究覚え書」をはじめとする3篇の鋭意な論文を発表され、大学院在籍中から将来を嘱望されるロシア経済史研究者でありました。

研究者としての先生の初心は、ロシア・ソビエト社会の発展過程をその歴史的基盤にさかのぼって解明することにあります。ソビエト内外での新たな研究動向を考察するうちに、先生は、農奴解放から農業集団化に至る時代のロシアが農村研究とりわけ農民社会研究において「世界で最も進んだ国の一つ」であり、その中心にいたのが「ネオ・ナロードニキ」と呼ばれた人々であったことを発見されました。昭和53年にはD A A D（ドイツ学術交換奉仕会）の奨学生として西ベルリンと西ドイツ各地で文献調査と蒐集をおこない、その成果をも踏まえて、カチョロフスキー、オガノフスキー、チャヤノフらの埋もれた労作を丹念に読み解くことによって、経済学的思考の一元性を否定し西洋経済学の相対化をめざした「ネオ・ナロードニキ」の思想を見事に再構成されました。これは国際的にも先駆的な業績であり、その一端はドイツ語版の文献目録と英語版の論文を通じて世界の学界の共有財産となっています。また、先生が本学に着任された直後から『甲南経済学論集』誌

上に精力的に連載された諸論考は、やがて『ロシア農業思想史の研究』（ミネルヴァ書房、昭和62年）として結実し、同書により、先生は昭和63年に東工科大学から経済学博士の学位を授与されました。

続いて先生は、平成元年から平成2年、平成5年から平成6年の二期にかけてカリフォルニア大学バークレー校スラヴ東欧研究センター客員研究員として留学されました。時あたかも「短い20世紀」（ホブズボーム）の終焉を告げる大転換期でしたが、帝政末期と1920年代（ネップ期）との度重なるロシア経済学の黄金時代と、そこでの市場経済論争を解明するために、コンドラチェフ、チャヤーノフ、ブルツクス、リトシェンコ、プロコポヴィッチと続くリベラル派経済学者の系譜の追跡作業をおこない、『二十世紀初頭ロシアの経済学者群像—リヴァイアサンと格闘する知性—』（ミネルヴァ書房、平成20年）に集大成されました。

上記2冊の著書のエピグラムで、先生は、「世界の動きに驚く能力こそが、その動きの意味を問うことを可能にする前提条件である」というマックス・ウェーバー『古代ユダヤ教』の一節を、最初は日本語訳で、次にはドイツ語原文で掲げておられます。それは単に後進の学徒への鞭撻にとどまらず、先生の教育理念の根幹でもありました。経済学部における先生の担当科目の軸であった「農業経済学」および「西洋経済史」の到達目標は、「現代史としての歴史」でした。また、講義における視聴覚教材の本格的な利用、ゼミナールにおけるディベート形式の導入は、経済学部では先生が嚆矢です。

大学や学部の行政面においても、先生は数々の委員を歴任され、誠実かつ熱心にその職責を果たされました。特筆すべきは、平成8年4月に甲南大学学生相談室長、平成9年4月から平成11年3月にかけて初代の甲南大学カウンセリングセンター所長に就任し、本学における学生支援体制の礎石を据える重責を篤実に遂行されたことです。続く平成11年4月から平成13年3月にかけては、経済学部長として、「学生を大切に」という所信に基づき、学生・

小島修一教授 略歴・著作目録

保護者との面談の充実に努められるとともに、カリキュラムの見直しに着手され、学部教育改革の先鞭をつけられました。

小島先生は、甲南大学在職中、研究・教育・行政のいずれの方面においても多大の貢献をされました。それは一人の紛れもない学究かつ教育者の範であります。先生のご健康とますますのご健筆を心からお祈り申し上げますとともに、今後ともさらなるご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申しあげる次第です。

ここに本記念号を捧げ、先生に感謝の微意を表しますとともに、重ねて先生のご多幸を祈念いたします。

平成24年3月

経済学部長／経済学会評議員長 永 廣 顕